ハレばれユカイ
おさわりは校則違反!
小説 神楽陽子
挿絵 さとみ
立ち読み版

第一話　ドキッ！　学園はウサギさんだらけ？　006
第二話　僕だって男の子だもん！　038
第三話　おっぱいウサギに甘えちゃえ　083
第四話　ひとりエッチはさせないぞ　129
第五話　僕だけのロイヤルサービス　192
エピローグ　ミルクの時間は三匹とも一緒に　247

登場人物紹介

Characters

橘ナツキ（たちばな）

弘一の家のご近所さんで昔から縁のあるツンデレ系のお姉さん。人並み外れた器量と行動力があるものの、少々暴走しがちな所が玉にキズな黒バニー。

狼谷架乃（かみたにかの）

弘一の同級生兼クラス委員長。女性SPのライセンスを取得するためにスクールへ入学。弘一同様制服に戸惑っていたり。責任感の強い赤バニー。

鳳十字毬江（とりとじまりえ）

ナツキの同級生で上流階級のお嬢様。おとしやかだけど一般常識が少々欠けたスローペースな超天然白バニー。

宮下弘一（みやしたこういち）

ごく普通のシャイな男の子。復興した宮下家の次期当主になるため、スクールに進学するが過激な女子の制服にドキドキ…。

「ここです、コウイチくん。……初めてですから、あの、優しくしてくださいね……」
最初で最後の一枚は、彼女本人の手によってのけられた。内気な男の子のため、震える指でわざわざ拡げてもくれる。
（これが女の子の……！）
そこは橙（だいだい）を混ぜたピンクといった色合いで、ぬらぬらと淫靡に潤っていた。縦筋が舟形に割れてできた空間であり、肉唇が層を成している。
「ど、どうですか？　んはあ、ヘンじゃないですか？」
「ヘンじゃないと思うよ？　たぶん」
枠となる肉畝は厚い唇のようで、淫液が天然のリップクリームとなっていた。一対の花びらが綻んでおり、さらに奥まったところに、とても小さそうな入り口が見える。
性毛は恥丘に少しだけ生え揃っていた。バニースーツを着用するため、広範囲を剃っているのかもしれない。おかげで観察が簡単だ。
遠慮より興味が上まわり、つい間近から覗き込んでしまう。甘酸っぱいにおいが濃く、嗅ぐだけで酔わされそうだった。
小穴がひくつくと、毬江の細腰も弱く震える。
「そんなにじろじろ見ちゃ、はぁ、恥ずかしいです……」
しかし恥ずかしがっても、見せびらかすポーズはやめなかった。汗ばんだ太腿を抱えなおし、色香のこもった吐息を振りまく。

「少しだけ触っても、いい？」
アイコンタクトで確認を取ってから、弘一は指を挿し込んでみた。
ぬちゅぬちゅっ！
ぬめった肉唇が指にまとわりつき、直進を妨げる。
「んあっ？　えあ、こ、コウイチくん……激しくしないで？」
激しいつもりはなかったが、かなり感度が高いらしい。第一関節まで埋めただけで、牝ウサギがお耳を振りまわす。ロングヘアを波打たせ、火照った肉体を自らくすぐる。
膣口に入りきらない箇所には、乳首よりもまだ小さい突起があった。おそらくこれが急所のひとつ、クリトリスだろう。
指の腹で擦ると、バニーガールの腰がびくんと跳ね、たわわな巨乳を揺らす。
「ひはぁぁ！　そっそこ、ほとんど……っはぁ、さわったことなくて、よくわかんないんですけど、すごいです、あん、痺れちゃってます！」
男の子の目にも明らかなほど痺れているようで、抱えあげた太腿に指を食い込ませる。発情期の肉体は充分に温もり、淫液もお湯並みに高温だった。
本命の膣口は狭くて、指でさえ進入が難しい。ここにペニスを挿入したら、と想像するだけで先走り汁が滲む。
少年はズボンをくるぶしまでずらし、雄々しい肉棒を先頭にした。
「そろそろ……いくよ？　はあ、毬江先輩」

「どうぞ？　コウイチくん……恥ずかしいですから、はやく」
お互いの緊張感も甘いムードとなり、息乱れるほどに股間が熱く昂る。
処女穴にオチンチンが差しかかると、毬江はきゅっと下唇を噛んだ。やはり恐怖もあるようで、ウサギのお耳を弱気に倒す。
「痛かったらすぐ言ってね、くうっ、うあうぅ！」
挿入する少年のほうも弱気だ。合意のうえ、とはいっても、女の子を傷つける行為には違いない。彼女を痛がらせる度胸はなく、尻込みしてしまう。
ずぶぶっ、ずぶ！
それでも濡れた肉唇に誘われ、ペニスを進めたくなった。指では曲がってしまって直進できないところを、剛直の硬さで突き破る。
「あはぁああッ！　は、はいって！　コウイチくんの、あんっ、はいってます！」
敏感な牝ウサギがしゃくりあげ、可憐な唇をわななかせた。少しでも刺激を和らげようと、腰をくねらせる仕草がかえっていやらしい。
生殖穴が拡がりつつ、煮えた淫液を吐いて肉棒をぬめらせる。
「これすごい、はあっ、だ、だめ、引き返せないよ！」
少年も汗だくになり、お姉さんと一緒に苦悶した。ナツキの口奉仕さえ比較にならない苛烈な締めつけが、亀頭を包み込み、続けざまに雁首へと降りてくる。ぬめりや熱を全部感覚するのが怖いほどの刺激で、できるものなら腰を引きたい。

だが、毬江の両脚が男の子を逃がしてくれず、蟹挟みにしてしまう。
「ひっひろがる！　アソコが、っひぁぁ？　んくふ、ひろがっちゃいそうです！」
さらに彼女は両腕で弘一の首筋にしがみつき、肉洞の拡張に悶えた。着用中の網タイツで裸の少年をくすぐりながら、息継ぎするみたいに喘ぐ。
ぐちゅぶちゅっ、ぶち！　ぶちぶちっ！
裂けるような感触の直後、膣の吸いつきが格段に強くなった。
「んひぃいいいいぃい……ッ⁉　えぁはっ、コウイチ、くん……んふぁぁ！」
バニーガールの細腰がのけぞり、巨乳のしこった角を仰向かせる。
今しがた処女膜を破ってしまったのかも。
「ごっ、ごめん！　毬江先輩、はぁ、と、とめらんない！」
しかし少年はペニスの突進を止められず、根元まで飛び込ませてしまった。腫れた亀頭はおそらく彼女の、おへその近くまで届いているはず。
膣の中はぬかるんでおり、舌によく似た感触だ。それでいて圧力も凄まじく、肉棒の形にぴったりと粘膜が吸いつく。
（これがセックス！　すごい、気持ちよすぎる！）
彼女を傷つけた後ろめたさはあったものの、興奮とともに感動を禁じえなかった。
オチンチンが熱いのか、ウサギさんのオマ〇コが熱いのか、わからない。狭苦しいせいで勃起の脈動がいやに強く感じられる。

「あふぅ、はぁあ……コウイチくんに、あん、奪われちゃいましたあ」
純白の装いが清純かつアダルティックなバニーガールが、艶かしい笑みを深める。破瓜の痛みは薄れてきたらしく、さっきまでよりは幾分余裕のある表情だ。男の子にくっつきたがり、網タイツの脚で器用に抱きついてくる。
「僕も毬江先輩に、んくう、初めて、奪われちゃったよ」
膣の締めつけは想像以上に強く、完全勃起でもひん曲がりそうだった。ピストンすればいい、とわかっていても、ペニスがひりついてしまって始められない。
今も暴発させずにいられるのが不思議なくらいだ。
「ちょっとだけ、はあ、休ませて」
甘えたがりな少年は、白ウサギのふくよかな巨乳にかぶりついた。
「やっやん！　コウイチくん、んあぁ、いきなり」
赤ん坊みたいに乳頭を頬張り、ちゅぱちゅぱと音を立てまくって吸う。精一杯にムードを盛り上げたつもりでも、幼稚なアプローチになってしまう。
そんな男の子の頭を、お姉さんはよしよしと撫でてくれた。母性本能でも触発されたかのように、優しい手つきで弘一の襟足をかきあげる。
「んもう、っあふ、赤ちゃんじゃないんですから、あっ？　強く吸っちゃ！」
お子様扱いされると発作的に昂った。しこった乳芽に舌を巻いたり、弱く歯を立てたりして、甘酸っぱい柔乳を味わう。

赤ちゃんの真似事をお姉さんに見守られて、赤面するほど恥ずかしい。
「だって美味しいから、あむっぅ、まりえせんぱいのおっぱい」
しかし見られたい、見て欲しいという倒錯の欲求もあった。緊張しつつ、こちらから彼女の顔を見上げ、目を合わせる。
毬江の瞳がおもむろに睫毛を伏せた。その意味を問いただしては、デリカシーがないと怒られてしまうだろう。
「コウイチくん……ンッ、んむぅ、あむ！」
「僕もうっ、はあ、あぅぐ！　んう！」
引き寄せられるように互いの唇が重なり、濃厚なキスを始める。熱い吐息の乗った舌を絡み合わせると、彼女の荒々しい息遣いで溺れそうになる。
（セックスして、キスまで！）
脳まで溶かされそうな心地よさだ。回数をこなすごとに、少年も毬江もキスの深さに躍起になって、唾液と喘ぎを交換した。キスに同調してオチンチンとオマ〇コもうねり、唾液のような蜜を絡めあう。
「んぷあっは、コウイチくん、はぁ、わ、私……」
ここで言わせてしまっては、男の子失格。
「わかってるよ、毬江先輩。できるだけゆっくり、ふう、動かすから」
バニーガールに脚で挟まれながら、少年は身体を垂直に起こした。キスで残った涎を口

にぶらさげたまま、いよいよセックスのため、腰を突き動かす。
ぬちゅぬちゅっ！　ぐちゃっ！　ぬちゃぐちゃ！
動かしているのはこちらのはずなのに、肉穴のほうからしゃぶりつかれるみたいだ。粘膜と擦れることで、肉襞の感触が無限に現れ、裸の亀頭をくすぐりたてる。瞬く間に性感帯が強く痺れ、下半身が引き攣ってしまう。
「あぁん！　めくれちゃいます、ひはあぅ、あっあふ！　コウイチくぅん！」
悶える毬江は、緩みきった唇の両端から涎を滴らせた。いつものように上品に振る舞ってはいられない悩乱ぶりで、舌をのたくらせる表情も悩ましい。
牝穴から熱い淫液が溢れ、肉棒を潤す。
「すごいよ、毬江先輩！　いいっ、うあっあ！　気持ちいい！」
マラソン同然に少年も息を乱し、悶絶した。バニーガールのガーターベルトを引っ掴み、股布の脇から肉穴に出入りする。
膣の窄まりが剛直にフィットし、一度に無数の粘膜襞を這わせてくるのだ。前に進んでも後ろに戻っても、むず痒い雁太を熱烈に包み込まれ、芯までひりつく。
「わ、私……っひあん、もっと痛いと思ってたのに、こんなの……しっしびれて！　オチンチンあたったとこ、えへっあ、しびれちゃうんです！」
白ウサギのお耳が大きく揺れた。男の子の首筋にしがみつきながら、毬江も頻繁に腰をくねらせるせいで、ロングヘアが乱れてしまう。

芳しい悦がり姿を見ているだけでも、劣情がむらむらと燃え上がった。

（毬江先輩が！　こんなとこで僕と！）

セーラーの付け襟で優等生を気取っているのに、裸の巨乳を汗だくにして。学園の女子トイレで、オチンチン専用の便器になってしまっている。

「ウサギさんの毬江先輩、っはあ、エッチすぎるよ！　エッチで、か、可愛くって！」

発情期ならではの、バニーガールの悩殺的な色香にくらっときた。ペニスの性的興奮が込みあがるように高まり、心臓も暴れっ放し。

ありったけの想いを込めるほど、ピストンは野蛮になる。

ずちゃっずちゃ！　ぬちゅぬちゅっ、ぐちゃ！　ぐちゃっ、ぬちゃ！

動きは単調かつ直線的であるものの、激しく、掴んでいるガーターベルトが千切れそうなくらいだ。結合部からは毬江の発情汁が零れ、玉袋にも伝ってきた。

「コウイチくん、もっと！　あはぁん、もっとずぽって、んふぅ、頑張ってえ！」

最初は「優しくして」と言っていた毬江が、おねだりを始める。熱硬い肉棒が一番奥にぶつかるのがたまらないらしく、切ない顔つきで涙ぐむ。

彼女の表情と巨乳の揺れを目安にしつつ、少年は一生懸命、腰を返した。

「頑張るよ！　毬江先輩、はあっ、僕、もっと頑張りたい！」

前にスマタで練習したおかげもあってか、腰の使い方も慣れてくる。ペニスの動きも機敏になり、肉襞の波をかいくぐった。

締めつけがよくなり、うねる圧力が芯まで届く。挿入した直後に比べて、膣のひくひくとした動きが頻繁になったような感触がした。
窄まりがちな牝穴から肉唇がまろび出ると、濁ったエキスが沸き立つ。
「なっなんだか、ひはぅ、私！　おかひくっ、んぁあ！　な、なにかきちゃう！」
肉棒もガマン汁を溜め込むように膨らみ、弘一を焦らせる。
「イクの？　毬江先輩、はあ、僕も！　もうすぐ！」
「そ、そおです！　これイクっ、イっちゃうんれす、あはぁん、私！」
毬江はウサギのお耳とロングヘアを振り乱し、男の子の首筋に掴まりながら、色っぽく喘いだ。網タイツつきのくすぐったい脚でもしがみついてくる。
少年もガーターベルトを引っ張り寄せつつ、オチンチンを大暴れさせる。
ずちゅっずちゃ！　ぱんっ！　ぱんっぱんっぱんっ！
結合部では発情汁が白泡となって弾けた。膣の中でも粘膜が煮え滾り、男の子のペニスを液たっぷりに熱く包み込む。
ヒダヒダのぬるつきが絡みつくと、甘く痺れた。
「あはぁあん！　もっもう、んあ、だめです！　私っ、コウイチくんのオチンチンで、ひはう、イクっ、イクぅう！　えへぁ、このままイかせてくだはぃ！」
同じ痺れに毬江も喘ぎ、より激しい摩擦を欲してくる。涎まみれの巨乳を柔らかそうに弾ませながら、両脚をきつく折り曲げ、男の子のピストンを逃がさない。

「僕も！　でっでも、はあ、このままじゃ出ちゃうよ、な、なかに出ちゃう！」
その脚がなかったとしても、腰を引くのは無理だった。感度の高まりすぎた亀頭が無性にこそばゆく、擦らずにいられないのだ。痺れつく雁太を粘膜襞で磨きつつ、膣の苛烈な締めつけでサオを扱く。
股間の底で俄かに熱量が膨らんだ。
「出るっ！　もう出ちゃう、はぁ、僕……はあっはぁ、はあ！」
「どぉぞ、コウイチくん！　なかに！　ひえっは、だしてください！　私をコウイチくんだけのモノに、あん、だひてっ？」
出してはいけない、と頭ではわかっているつもりでも、肉体は出すしかないところまで追い詰められている。ペニスだけ別の生き物のように暴れ、快楽神経を焼き尽くす。
とどめとばかりに毬江の肉穴がうねった。
「いいっイク！　えあぁ、イきますっコウイチくん！　もっもお、わたひ、気持ちいいのきへ、きへますっ、あはぁあああああぁぁぁあああ――――ッ！」
ウサギさんが呂律のまわらない嬌声を張り上げ、真下から打ち上げられるかのように、巨乳とお耳を振り上げる。涙ぐむ意味はあからさまな悦びとなり、しとやかな唇から舌が食み出した。そんな顔になるまで感じてもらえて、嬉しい。
生殖穴が強烈に締まり、飛沫を散らす。
プシュウウウウウウ！

彼女の体温を肌に浴びながら、少年も吼えた。
「ご、ごめん、毬江！　うあっあぁ、これ出る！　れちゃうよぉおおおおお！」
弱気な声とは裏腹に、オチンチンはまるで遠慮なしにお漏らししてしまう。
どびゅっ！　びゅびゅっ、どびゅ！　びゅくびゅくびゅく！
火照った身体でさえ、快感が熱い。
頭の中までとろとろになり、何に躊躇していたのかわからない。痺れっ放しだった怒張は甘く蕩けて、ウサギさんの清らかなオマ〇コに子種を吐き散らかした。
眉を少しも持ち上げられない表情の毬江が、淫猥に笑み崩れ、涎ごと舌を出す。
「おぉ、オチンチンが、びゅって！　えへぁ、びゅってれてますよぉ……！」
少年と一緒に腰を打ち震わせ、エクスタシーの悦楽に酔いしれる。
「すっすごぃ、うあっ、気持ちよすぎるよ……なかだし！」
放ったはずの高熱が雁首まで戻ってくる、未知の放精感だった。お嬢様の子宮バージンを我が物にした罪深いオチンチンが、残り汁を追加で噴く。
びゅるびゅるっ！　びゅる！　びゅるるるる！
体感的な量でいったら、満タンのオシッコくらいある。
女の子を便器扱いする行為自体も疚しくて、ぞくぞくした。お触り厳禁のバニーガールをトイレに連れ込み、犯してしまった背徳感。
（セックス……しちゃったんだ、僕！）

「だっ、だめです！　コウイチくん……出ちゃうっ、出ちゃいますから！」
倒れていたお耳が起き上がり、元気に揺れる。黒ウサギのナツキも、白ウサギの毬江も可哀想なくらい顔を赤らめ、小鼻をすすった。
ずっずぶ！　ぬちゅぬちゅぬちゅ！
お姉さんたちのそんな弱々しい表情に嗜虐心を触発され、つい力が入ってしまう。
とりわけお嬢様育ちの肛門にはスムーズに指が嵌まった。引っ込みがちな腰つきとは裏腹に、小穴は迎え入れるように拡がり、少年の中指をずぶりと呑み込む。
「やだ、毬江センパイったら、そんなに……」
隣で眺める架乃も驚くくらいの、卑猥な包容力だ。
窮屈ではあるものの、吸引力が凄まじい。肛門には煮えた液の感触が多いおかげで、想像していたほどの抵抗はなく、指は第二関節まで埋まった。
その指を捻るとアナルがうねり、お尻を一気に汗だくにする。
「ほんとに恥ずかしいんです、あふぁはっ、許してください……ご、ご主人様ぁ！」
悶え汗のせいで、優美に波打っていたロングヘアが、純白のボディスーツから食み出す肉体のラインにまとわりつく。
同じように少年は、黒ウサギの尻穴も穿（ほじ）ってやった。
「そんなのっ、はぁ、はいんないから、やめ……やっ、やめへってば！」
ナツキも毬江と競いあってお耳を揺らし、ポニーテールを振り上げる。成熟した肉体を

香汗で蒸らし、発情期のにおいを振りまく。
しかし彼女の肛門には、毬江のものほどスムーズに侵入できなかった。第一関節も入りきらないうちから、狭く、進入に抵抗するベクトルをくぐることができない。
「ナツ姉、もっと力を抜いてくれないと、はいらないよ？」
「はいんなくていいのっ、くふ、んあぅうふ！」
ナツキ本人の意志が括約筋の力となり、懸命に穴を閉ざしているのだろう。
しかし狭ければ狭いほど、不謹慎な興味も膨らみ、指を捻り込んでしまいたくなった。侵入の角度を上下に変えつつ、圧力の隙間を探していると、不意に引きずり込まれる。
ぬちゅぬちゅぬちゅっ！
「ひあっは？　やっやぁ、はいってる！　ユビはいってきちゃってるぅ！」
しゃくりあげて、バニーガールのお姉さんは窓枠に巨乳を落とし、突っ伏した。
彼女の尻穴が急に本性を露(あらわ)にしたのだ。少年の中指を奥へと連れ込み、強烈な締めつけを味わわせる。これはもう指を引き抜くことができそうにない。
「ナッちゃんセンパイまで……んはぁ、ヘンな声、出さないでくださいってば」
発情中の年上ウサギに囲まれて、架乃は困惑した顔だ。裸乳を隠しつつ、窓の外よりも両隣のバニーガールに頻繁に目をやり、頬をほの赤く染めていた。恥ずかしそうに、もどかしそうに身じろぎ、網タイツの太腿を擦り合わせる。
ふたりのお姉さんは逆に股を開いて爪先立ち、すらりと長い脚を引き攣らせた。毬江も

窓枠に巨乳を乗りあがらせ、嬌声を張り上げる。
「もう許して、あんっ、ください……恥ずかしくて、私、えあぁあ？」
「コウのエッチ、っひはあ、オシリなんて、だっ、らめなのに！」
このタイミングで誰かが倉庫の前を通りかかろうものなら、確実にアウトだ。ナツキも毬江も舌を引っ込められない、だらしのない顔つきで、悪趣味な肛虐に色悶える。
生殖穴と違って日常的に使用されるためか、直腸は蠕動の動きが多かった。
「すごいよ、ナツ姉のも、毬江先輩のも！」
あたかも指をしゃぶるような収縮を繰り返し、締めつけをまた強くする。ウサギさんの羞恥や拒絶にかかわらず、いやらしい仕組みの肛門は、少年の指に吸いつくばかり。
少し指を捻るだけで、年上のバニーガールたちが色っぽく喘ぐのもたまらなかった。
「やめてったら、コウ、んっンあぅ！　ユビ、う、動かさないで！」
「捲れちゃいます……っあ？　も、もっとゆっくり！」
弄っているのは排泄器官なのに、ふたりともぞくぞくと腰を震わせている。いくら拒絶したがっても、生理的な快感は堪えきれないらしい。
（たまんないよ、僕まで！）
性的興奮に拍車がかかり、弘一も口を全開にしておかないと、呼吸が間に合わなかった。ズボンの中央が出っ張り、仔ウサギのお尻にぶつかる。
「こっこら！　コウイチ、何コーフンしてんのよ、バカ！」

肩越しに振り向く架乃は、紅潮しつつ、出っ張りとの接触を避けようとした。
しかし男の子のほうから躍起になり、その形で、少女のお尻の食い込みをなぞる。手の数が足らないため、ズボンを脱ぐことができないのが煩わしい。
「架乃、お願い……はあ、脱がせて！」
「だ、誰がそんなコトするわけ……やっやだ！　近づけないで、わ、わかったから、ほんと脱がせるだけよ？　……襲ったりしたら、あとで許さないんだから」
執拗におねだりを続けると、渋々と、架乃が左手を後ろに伸ばした。ショートヘアで小顔を隠そうとする割に、指の動きは正確だ。
ジッパーをなぞりつつ降ろし、オチンチンを根元から取り出す。
「きゃっ？　す、すごい、ビクビクってしてる……」
ウサギの少女はぱっちりと瞬き、男の子の勃起に熱いまなざしを注いだ。軽蔑ではなく興味といった目つきで、幼い頬をほの赤くする。
飼い主のペニスは幹太り気味に膨張し、血管を浮かび上がらせていた。勃起そのものには筋肉以上の力が漲っており、触らずとも、熱を持っているのがわかる。
「っはあ、まだ苦しいよ、さきっちょがムズムズして」
すぐにでも扱きたい。しかし右手はナツキの、左手は毬江の排泄器官を穿り返すことで忙しく、手の数が足らなかった。
「コウってば、抜いて！　オシリのあなっ、めくれる、ひあぅ、めくれちゃう！」

ナツキのほうは不規則に伸びをして、ハイヒールの踵を数センチも浮かせている。病的に痙攣し、くねる腰つきには落ち着きがない。
「あふぅう……ッ！　言うこと聞きます、ですから、っあん、オシリはぁ！」
毬江も許しを乞いながら、肛門開発に喘いでいた。こちらのウサギも、本当に嫌がっているはずもない、おねだりみたいな声色を響かせる。
（オシリでこんなにエッチな声、出せちゃうんだ？　すごくやらしいよ）
その声を聞いているだけでも頭にくらっときて、眩暈がする。
網タイツを飾った肉感的な太腿は、八の字になるまで開き、透明の蜜を伝わらせていた。股間を頑なに閉ざしているのは、中央の仔ウサギだけだ。
「わたしまで、んあ、ヘンになっちゃう……も、もうだめ、ガマンできない……コウイチのせいなんだから、ば、ばかぁあ！」
勢いのない罵声の最後が、俄かに甲高くなる。涙目と涙声になりながら、架乃は左手の中指を折り曲げ、自ら網タイツを伝線させた。
牝のウサギには、群れで発情する習性があるのかもしれない。
（まさか架乃が⁉）
驚く少年の目の前で、ボディスーツの食い込みを剥がし、後ろの小穴を露出させる。
そして、グローブに包まれた中指を鋭い角度で当て、少しずつ沈めてしまう。
ぬちゅぬちゅぬちゅ！

「ひあぁあふ！　ヘンになってる、わたし、んくぃ、こんなコトぉ！」
クラス委員長のウサギさんは、拒絶しつつ満足そうな吐息を漏らし、お耳を小気味よく揺らした。ささやかな胸の膨らみも小さいなりに弾む。
股間ではぴりぴりと網タイツの裂け目が広がり、瑞々しい素肌を晒した。
自ら肛門をネチャネチャと鳴らし、悦がるさまがはしたなくて、いやらしい。
「すごいよ、架乃！　オシリでオナニーしちゃうなんて！」
悩殺的なオナニーを直視してしまったせいで、弘一のペニスはますます膨れ上がった。先太の形となって包皮を脱ぎ破り、エラ張りの亀頭を真っ赤に腫れ上がらせる。
「やだっ、架乃ちゃん、あぁふ！　オシリで、っひあぁえ、ヘンタイみたいなこと」
黒ウサギのお姉さんはどうやら、誰のためのお仕置きなのか忘れているらしい。飼い主が尻穴を捲ってでも躾けるべきだろう。
「いいんだよ、架乃、オシリでオナニーくらい普通だから。はあ、ナツ姉なんて、さっき男子トイレでオナってたんだぞ？」
「コウ⁉　い……いわないでって、いったのに……あっ、えぁあは！」
ナツキの顔が面白いように赤くなった。秘密を知られてしまった恥ずかしさと、年下の男の子に今だけは勝てない悔しさをありありと浮かべながら、それでも喘ぐ。
そんなナツキを、オナニー少女が非難することなどできない。
「ナッちゃんセンパイ、そんなコト……あっうく？　や、オシリなのに、これ……！」

意思はどうあれ、火照った肉体は尻穴への刺激が癖になったらしく、回数ごとに架乃の指繰りは巧みになった。単純な抜き挿しのみならず、適度に捻りも加えて、肛門の三百六十度を擦りたてる。

いかにも「かきほぐす」動きで、同調して腰もくねるのが実にさまになっていた。指先で小穴をぬちゃぬちゃとかき混ぜては、吐息の溜まっている唇を緩めてしまう。

女の子がそうするのだから、気持ちいいことは間違いない。

(指をこんなふうに、もっと)

弘一は架乃のオナニーを手本にし、ナツキと毬江の尻穴に指を送り込んだ。動きが直線的にならないように、しっかり捻って。

「だっ、らめです……声、出ちゃいますから、っあん！　コウイチくぅん！」

しばらくは声を抑えていられた毬江が、発作に陥ったように悩乱する。彼女だけは腕を拘束されていないものの、手すりに掴まり、踏ん張りを強くしていた。

その反面、下半身は制御が利かないらしく、不安定に爪先立つ。

「激しいです、んあぁ、見つかっちゃいます！　くふぅうッ！」

「もういじっちゃ！　おっお願い、コウ、それいじょうは、あ？　んぁあ」

黒ウサギと白ウサギの二匹は、乱れた呼吸で乳果実を上下させ、猥褻とは思えないほど流麗に髪を波打たせた。上ではお耳を、下では腰を振り、肛門遊びに悶絶する。

平等に躾けてやってこそ、ご主人様だ。

「毬江先輩、気持ちいい？　はあ、トイレする時とどっちのほうがいいか、教えてよ」
言葉責めされることはなかった従順なバニーガールが、吐息混じりにはぐらかす。
「そ、それは……んあっ、や、いえません……ひぁ、しらないです」
「知らないわけないでしょ。ほら、どうかな？」
育ちのよいお嬢様には意地悪すぎる問いかけだろう。大きい排泄のほうが、とも、肛門をこうして穿られるほうが、とも言えるはずがない。
「だったらナツ姉は？　ナツ姉は、はあっ、トイレでオナっちゃうくらいだし」
「ち、ちが！　や……さっきから、コウ、ひぇ、ヘンタイすぎ！」
認めはしないものの、ふたりとも少年に尻穴を開発され、心地よさそうだった。依然として羞恥による拒絶はあるが、肉体の感じやすさや、甘い声色は誤魔化せていない。
中央の仔ウサギなど、アナルオナニーに熱中している。
「ひへぇはっ、どおして？　オシリなのに、ひぁ、しびれるの……ユビとまんない、コウイチが、あぁん、ヘンなことするからぁ！」
「僕は何もしてないってば。架乃、すごく気持ちよさそうだね」
見ているだけで、むらむらと獣欲が込み上げた。ウサギを狩るオオカミの部分に熱い血潮が漲り、脈打つ先端が、全身の重心さえふらつかせる。
甘酸っぱいにおいとともに淫らなムードが充満し、くらっときた。
（ガマンできないよ、こんなの見せられたら！）

バニーガールたちのアナルパーティーはまだまだ盛り上がり、破廉恥な粘音の派手さを競っている。どの穴も異物に貪欲なくらい吸いつき、まるで離そうとしない。
ナツキと毬江の肛門をほぐしつつ、そのお尻を撫でることもできた。
「ほんとだめ、やっ、オシリなんかなのに……ヘンなの、ひぁはん、あっあたし！」
「こんなにされたら、あふ、私、だめです、いぃ、イっちゃいそおです！」
温もって汗ばんだ肉体がのけぞり、躍るように尻尾を揺らす。
「暑いでしょ？　毬江先輩、はあ、上だけでも脱いじゃったら？」
バニーガールたちは当然、暑いからといって脱ぐまでもない刺激的な格好だ。それでも健気な白ウサギは、飼い主の意図するところがわかってしまったらしい。
「コウイチくん、それは……あっ？　ぬ、脱ぎます！　脱ぎますから、ぉ、オシリ！」
さらに尻穴を拡げるようにほぐしてやれば、素直になった。正面の窓が全開であるにもかかわらず、おずおずと、ボディスーツをぺろんと剥がす。
セーラーの付け襟で優等生ぶった巨乳が日差しに晒され、艶やかに照り返った。たわわな果実は麓を重力に引かれつつ、突起を上に向け、疼かせている。
「んふぁ、ナ、ナツキさんも、一緒に……」
「やだ、毬江さん？　ひあ、だ、だめ、ずれちゃう！」
毬江の上品な手つきは、架乃越しに黒ウサギのナツキをくすぐり、ボディスーツの紐を緩めてしまった。腰から上のエナメル生地が左右に開き、真っ白な曲線を溢れさせる。

「さっ、最高だよ！　オッパイスポンジ！」
よっつの巨乳によって、視界は近距離で埋め尽くされてしまいそうだ。
同時に、直視できないところでも強い快感があった。ぺったんこの架乃が不満そうに肉棒を絞り、尿道のカウパーを押し出す。
「わたしだって、もうちょっとくらい……お、大きくなるんだから」
敏感な亀頭へのくすぐりも織り交ぜ、一生懸命にペニスの世話をしてくれる。その一途さにも劣情を禁じえなかった。
「架乃のおっぱいも、はあ、可愛いってば。見せてよ」
「そ、そんなコト言って……その気に、んはあ、させようったって……」
文句を言いつつ、結局は見せてくれるところがいじらしい。赤いボディスーツが左右に開いて、発育の遅い、ささやかな膨らみを曝け出す。
架乃も前のめりになり、すべすべの生乳をソープでぬめらせた。バニーガールたちの曲線が押しあいへしあいして、ご主人様の真正面を独占しようとする。
「ちょっと待ってよ、三人とも、はあ、こっ、こら！」
仰向けの少年が左右の膝を立てると、ちょうどナツキと毬江の股座に当たった。
「やん、コウったら、っんふ、えっちすぎ！」
「こすれて、あん！　私までキレイになっちゃいそぉです」
ふたりのバニーガールが競って腰をくねらせ、男の子の膝頭に恥丘を擦りつける。股布

の両脇から溢れるソープは、ほかの箇所に比べて熱い。
「わたしのはすごいわよ？　んくっ、あっあぁ！」
中央の架乃はテコキを中断し、次は股間でペニスを挟み込んだ。正面からのスマタで、濡れそぼった網タイツの間を、亀頭だけお尻の側へとくぐり抜ける。
張りのよい太腿がむっちりと閉じ合わさると、締めつけがサオに効いた。
「架乃？　いいよ、すっ、すごくいい！」
三人分の体重にのしかかられても、苦にならない。むしろ柔らかさに重さが加わることで、密着が深まる。
ご主人様は息を大きく乱しながら、懐っこいウサギさんのお耳や尻尾を撫でた。
びしょ濡れのバニーガールたちも色っぽい吐息を振りまき、バスルームに淫らなムードを充満させる。
「ねえ、コウ？　んはぁ……そろそろ、あたしと、やん！　こすれる！」
「私、またおかしくなっちゃってます！　あはあっ、腰が、とまらなくって！」
巨乳がソープまみれの黒ウサギと白ウサギは、競争するみたいに細腰を波打たせた。少年の膝の角で、薄生地越しに秘裂を強く擦ろうとしてばかり。
真中の仔ウサギは太腿を小刻みに擦り合わせることで、オチンチンを締め上げる。
「コウイチの、ふあっ、びくびくしてるぅ……出るの？　これ」
三匹のバニーガールが自分の膝やペニスに跨り、競うように腰で跳ねているさまは、衝

動的に狂おしかった。愛らしいお耳の揺れも、股間の刺激とシンクロしており、ご主人様にじゃれつつ、快楽を貪ってもいるのがいやらしい。
「んはあっイクよ、出る！　出させてっ！　はあ、うあぁ！」
もう少しは耐えられると思っていたが、肉棒の熱量がみるみる膨らんだ。たまらず弘一はナツキと毬江のお尻に掴まり、ありったけの指を立てる。
甘い痺れとともに熱量が膨張するにつれ、感度は高まり、喘ぎも速くなった。ひとりでに身体がのけぞり、小柄な架乃を持ち上げる。
「きゃ？　コウイチってば、ひはふ、こぉいう時だけ、力持ちで」
くすぐったい網タイツの感触が集中する、その股間で、ペニスがのたうつ。
「また架乃ちゃんと、コウ、ずるい……あっ、あぁあ？」
「ひぁん！　も、もっと、あーんしてください！」
息苦しいはずなのに、目の前の乳果実を頬張らずにいられなかった。ナツキと毬江の巨乳にかぶりつき、しこった突起を舌で弾く。
際限なく涎が出て、何分でも、何十分でもしゃぶっていられそうだ。
（ものすごいたくさん出そう！）
一方、肉砲から滲み出るカウパーは途切れ、尿道が異常に乾いてひくひくした。
ぬちゅっ、ぬちゃ！　ぬちゅぬちゃ、ぬちゅ！
「こぉでしょ？　イっちゃいなさいよ、あはんっ、このスケベ！」

架乃の狭い股間でサオを磨かれつつ、温かいソープで亀頭まで包まれる。張り出たエラと網タイツが擦れると、電流じみた痺れを生じ、腰が喜んで跳ねてしまう。
「ほんとイクっ、はあ、僕、ウサギさんとイクよぉおおお！」
両手で長身のバニーガールを抱きかかえながら、もう一匹にオチンチンを扱いてもらう王様気分が、怒張の興奮を真っ赤に昂らせた。
ソープまみれの少年を、ナツキと毬江も生乳で擦って、追い詰める。
「イク時のカオ、あふ、見ててあげる、ほら、ボクぅ」
「どうぞ、あんっ！　だ、出してください、びゅーって！」
年下の男の子を、ナツキは上から目線で見下ろすように、毬江は下から覗き込むように見守り、微笑む。ふたりとも余裕を装っていても、唇の端が締まっていない。
「もうだめっ、こすれへ、わたしだけ、またヘンタイみたいなことぉ……あふぅう！」
ご主人様ののけぞりで持ち上げられる架乃は、だらしなく舌を出していた。悶える少年をまじまじと見詰め、うっとりとする。
きつく閉じ合わさった太腿の間で、ペニスが俄かに先走り汁を噴き上げた。
びゅっびゅる！　びゅるびゅる！　びゅるるるるるるッ！
尿道が捲れそうな、それこそオシッコみたいな勢いで、子種が飛び出していく。同時に少年は軽い飛翔感に打ち上げられ、甘美なエクスタシーに酩酊した。
「うあああああっ出てる！　れちゃってるよぉ、み、みんなのまえで……ッ！」

イク瞬間の、恥ずかしい表情を女の子たちに見守られて。
張り詰めていた亀頭で熱い快感が連鎖し、ペニスの感覚を蕩かしてしまう。
汚濁を噴き散らかすオチンチンを太腿で挟みながら、股間の作りが幼稚なクラス委員長もお漏らしした。
「んくぅううう……らっ、らめ、わたしも、コウイチぃいいいいッ！」
涙ぐむほど赤面して当然の、恥ずかしい水音が立ち、少年の玉袋を熱く濡らす。
チョロチョロチョロチョロチョロ！
クラス委員長であるにもかかわらず、このウサギはマナーがなっていない。
少年が抱える二匹もお尻を震わせ、唇とともに眉根を緩ませていく。
「あっあたし、あたしも、コウと一緒に……んあぁぁあああ！」
「私もご一緒させてください、コウイチくん、ンッ、ふぅううぅうう！」
架乃よりひとつ年上のお姉さんたちも、特製のシャワーでボディスーツの股底を濡らし始めた。バスルームに酸っぱいにおいが立ち込める。
コポコポッ！　チョロロロ……シャアアアアアア！
おかげで、ご主人様は股間だけでなく、両膝までオシッコでびしょびしょだ。ソープは流れ、ねっとりとした液体の感触が多くなる。そのうち、肉棒と玉袋の継ぎ目に流れるのが架乃の幼稚なオシッコだろう。
「だめだよ、架乃も、はぁ、ナツ姉も、毬江先輩まで……」

バニーガール三匹ともにお漏らしさせながら、少年はくらくらと淫らに酔った。
ナツキと毬江はおそらく架乃に対抗して、自ら失禁したのだろう。オシッコなどで競争するウサギさんたちの、恥じらいつつも恍惚とした顔つきがいやらしい。
「んはぁ、わ、わたしまで漏らしちゃうなんて、ふあ、コウイチのせいなんだからぁ」
やがて架乃がずり落ち、ペニスを解放した。生意気な口調は舌足らずになり、唇から涎ごと舌が零れてしまっている。
オチンチンは精を吐いたばかりのはずなのに、まだ痛いくらい興奮しており、雄々しい脈拍も鎮まらなかった。
両膝に跨っていたバニーガールたちも降り、少年の身体をお湯ですすいでくれる。
「もう、私……ヘンになっちゃってます、その……ご主人様の見てるだけで」
清純派の白ウサギは裸乳を隠しつつ、男の子の勃起ぶりに見惚れていた。ロングヘアが絡みつく豊満な肉体を、しとどに濡らし、色気をムンムンとにおわせる。
色違いの網タイツを穿いた黒ウサギも、剛直をあからさまに意識していた。
「や、やだ、さっきより大きくない？　そんなの、ほ……ほんとに挿れちゃうの？」
毬江や架乃と違って、ナツキだけセックスの経験がない。それだけに、勃起のサイズには驚きや戸惑いがあるのだろう。
「ここだとのぼせちゃうよ。はあ、続きはベッドのほうに行こっか」
ふらふらと立ち上がる少年の股座で、オチンチンは野性的にいきり勃っていた。

（ウサギさんともっと！　遊ばなくっちゃ！）
発情期のウサギさんたちを早く食べてしまいたい。身体を拭く時間も惜しくて、円形のベッドに転がり込む。
ＶＩＰルームのバニーガールたちは生乳こそ晒しているものの、セーラーの付け襟は健在だ。窓の下には多数の生徒がいる。おかげで、学園の一室なのだという後ろめたい実感を振りきることはできないが、かといって中断などできない。
ウサギさんたちはカジノのほうも気になっている様子だが、最初にご主人様のベッドによじ登ってきたのは、スケベなお嬢様だった。
「ご主人様、今夜は……ど、どうぞ？　こちらでお楽しみください。私のココ、んはあ、すごくオチンチン欲しがって、さっきから、びくびくって……」
お尻を向けて恥ずかしがりながらも、ボディスーツの両サイドを解いて。ショーツタイプの薄生地を捲りおろし、深窓のオマ〇コを紹介する。
小指を立てる上品な手つきで拡げられた生殖穴は、サーモンピンクの粘膜をぬめぬめと潤わせ、男の子の侵入を待ち侘びていた。恥丘にだけ生えた性毛は髪と同質で、櫛が簡単に通せそうだ。
「お願いです、っふあ、私、自分では……上手に、あん、できないんです」
大胆かつ優美に脚も広げ、もどかしそうに腰を震わせる。けれどもオナニーは少年の目にも明らかなほど下手くそで、肉唇の外側ばかり弄っていた。

（毬江先輩のなかに……？）

その中を、自慢のエラ張りでかきまわしまくりたい衝動に駆られる。

「わたしでしょ？　ご主人さま、わたしの時は、はぁ、あんなに夢中だったくせに」

続いて架乃もベッドに登ってきた。毬江の左で、ご主人様のほうを向き、バニースーツの股布に指を差し込む。すると股間一帯の網タイツが裂け、幼い割れ目を覗かせる。

どこにも毛は生えておらず、恥丘はつるつるだ。

少女のおてて、貝のように閉じたそこをこじ開け、見せびらかす。

（架乃のもやらしくって、すごく気持ちよさそう！）

欲張りな少年は遠慮なしに近づき、性粘膜のぬらつき具合を覗き込んだ。架乃のものは肉唇が奥に引っ込んだ作りであり、挿入感は確か、膣口が強烈に狭かったはず。

「どお？　クラス委員長と仲良くして、んえぁ、損はないわよ」

しかもクラス委員長がオナニーを始めたせいで、釘付け。それなりに自慰をこなしてはいるらしく、肉豆を指で穿り当て、弾くのが上手かった。小柄な肉体が敏感そうに震え、小振りな双乳をささやかに揺らす。

毬江ウサギのほうも我慢できないといった面持ちで、指繰りがもどかしい。

「お願いです、んはあ、ご主人様ぁ……ココでお休みになって？」

「だ、だめです、毬江センパイ！　密会を押さえたのはわたし、なんですから」

ずぶ濡れの肉体はどちらも同等に火照り、芳しいにおいを二重どころか、二乗に高めて

いた。だが、今夜のオチンチンには先約がある。
「ナツ姉は？　おねだりしてよ。じゃないと、ほかのウサギさんに挿れちゃうぞ？」
弘一が視線で合図すると、幼馴染のお姉さんが顔をかあっと赤らめた。いつもの余裕もなしに生乳をかき抱き、もじもじする。
「そんなこと、いわれたって……あ、あたし」
年下の少年をリードするつもりだったに違いない。ところが、毬江ウサギや架乃ウサギよりも淫猥に処女穴を紹介しなければならないのだ。
「ご主人さま、っんふぁ、いつまで女の子に、こんなポーズ……」
「いらしてください、ご主人様……あんっ、もうどろどろです」
ナツキが尻込みしている間も、ベッドの上のバニーガールたちは肉唇をかき分け、膣口を指でほぐしていた。ペニスが脈打つたびに狙いを変え、ガマン汁を滲ませる。
（はやく！　はやく挿れたい！）
おかげで、弘一の精神力も尽きようとしていた。勃起は痛いほど赤く興奮し、今すぐにでも飛び込みたい。膣の感触を擦りつけたくてウズウズする。
「じ、じゃあ、僕……」
「だっだめ！　今夜は、あ……あたしの約束でしょ」
飼い主が二匹のペットを我が物顔に抱き寄せると、寂しがり屋の一匹が鳴いた。ようやく寝台によじ登り、真正面から、おずおずとメインディッシュを差し出してくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

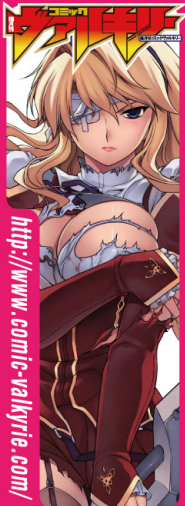
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！